国語（問題）

2013年度

〈2013 H25070111〉

注意事項

1 問題冊子および記述解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。

2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 受験番号および氏名は、試験がはじまってから、解答用紙の所定欄に正確に記入すること。記述解答用紙の所定欄（2か所）には受験番号と氏名を、マーク解答用紙の所定欄には氏名のみを記入すること。

受験番号の記入にあたっては、次の数字見本に従い、正確にていねいに記入すること。

数字見本
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9

5 マーク解答用紙のマーク欄には、はっきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムでていねいに、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	○悪い	◎悪い
マークを消す時	○良い	○悪い	◎悪い

6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の甲・乙を読んで、あとの問いに答えよ。

甲

〔次の文章は、雨森芳洲の『たはれ草』に収められた随筆文である。なお、途中省略した箇所がある。〕

もろこしの詩、この国の歌、深奥なる事変はりはあるまじ。詩は作りよけれど、歌は詠みがたしといへる人あり。これはさる事あるべし。歌はこの国の言葉なれば、かく詠みては歌にはあらぬといふ事、詠める者も、また見る者もそのおぼえあれど、詩はもろこしの言葉なれば、そこそこに作りてもおほかた聞こゆるほどなれば、その身もよしと思ひ、見る人も妙なりとほめはやすより、歌は詠みがたし、詩は作りやすきといふなり。もしもろこし人、この国の歌詠む事あらば、歌は詠みやすけれど、詩は作りがたしといふべし。詩は作りやすきといへるは、詩を知らぬ人の言葉、歌を詠みやすきといへるは、歌を知らぬ人の言葉なるべし。いづれかたやすき事ならむや。文作る事も、またこれに同じ。

この国に仮名といふものなくば、人々文字を知るべきにA といへる人あり。これ思はざるの言葉なるべし。もろこしの文字、西域の梵字、韓国の諺文、この国の仮名、そのほか韃靼、おらんだの文字、みなみなその国の言葉に応じ、誰始むともなく、女童、下々までこれを用ゆ。まことに自然の理に出でたり。仮名といふものなくばといへるは、その国々の言葉なくばといへるに等しかるべし。

この国の詩作り、文書ける人、その才学を見れば、もろこしのたれ、それがしなどいへるに、さまで劣らじと思ふ人いかほどもあれど、言葉の違へる故にこそ、それのみにてやめ、うらめしといふべし。

もろこしの言葉知らずしては、詩作り文書くことなるまじと、もろこし言葉学べる人は必ずいへるを、もろこしの言葉知りたる人の詩文を見るに、さまで変はりたることなければと、またある人のいへる、これは皆そのB ひとかたのみを知れる言葉なるべし。詩文は言葉の精華なるものなれば、言葉を知らずして、いかでか精華を求むべき。この国の言葉知らぬもろこし人、歌詠むといはばC をかしきことと思ふなるべし。されど詩文をよくせぬもろこし人、いかほどもあれば、もろこし言葉知りたりとて、詩文をよくすべきにもあらず。まことの詩文といへるは、もろこしの言葉知りて、しかも才学すぐれたる阿倍のなにがし、釈空海などいへる人こそ、恥ぢ顔 D 。それがしももろこし言葉少し学びたれど、詩作り文書く事は知らざる故、それがしのつたなきを見て、もろこし言葉捨て給ふなと、同志の人には常に語りき。

おほよそあらゆる文字、訓はこの国の言葉なれど、音はもともろこしの音なり。されどもろこしの音に似たるは甚だ少なし。風気の異なる故にや、橘は淮を渡りて化して枳となるといへるを、不思議なりといひしに、この国にても蜜柑、九年母などいへるもの、その樹を移して出羽に植うれば、みな枳殻となるといへり。ちかごろある和尚の物語に、薩摩より出づる紅蜜柑といふもの、色もうるはしく、味はひも優れたれば、その種を取りて植ゑしに、ほどなく萌え出でたれど、みなみな柚となれりと語りき。唐音もひと伝へふた伝へ過ぎば、いつとなくこの国の音となるべし。唐音唐話を学ぶ人は、いつとてももろこし人に習ふよりほかあるまじ。黄檗の課誦はみなみな唐音なれど、何事ぞやと唐僧は疑へるといへり。これも数世の後には、この国の音となるべし。

もろこし音にて上より読みくだし、文義の通ずるといへる事、不審なりと思へる人ありしまま、いかにもさ思ひ給ふなるべし。されど物事馴るるにこそ候へ。それがし十四歳なりし時、もろこし人に下知し給ふ文、あづまよりくだり候へど、文字の道違へる故にや、もろこし人読み重ね候ひて、訳者ども集まり、あらためて見せ候ひしと、商物するとて長崎に通へる稲某といへる者語りしまま、E げにもと思ひ、二十四歳なりし時より、もろこし音を学べり。初めはよその事聞けるがごとくおぼえしかど、年の数二十あまり重ねて、おほかたこの国の物読みするに近くなり、目の当たりの事は、もろこし人と物語りをもなせし。生まれつきさとく、いとけなき時より学べる人は、それがしがごとくにはあるまじ。世の逆事といへるもの、はじめはいひがたく、聞きがたけれど、後には常となるがごとく、また F 不了簡などいへる、無の字不の字を先にいふは、この国の言葉にはあらねど、馴るる故にこそ思慮に及ばず、耳にも入り、口にもいへ。もろこし音学ぶも、またしかなりと知り給へと答へき。

上より読みくだして文義の通ずる事、人々よくすべきにしもあらねば、G 通国の法とはなしがたかるべし。生まれつきを見て教ゆべきにや。韓言葉は甚だやすし。それがし韓へ行き、三年力を用ゐて、おほかたつかへなきほどに学べり。我が国に同じく反言なるが故なり。

この国に文作るといへる名ある人、経義を説きて書ける書物を韓人に見せけるに、これを見候へば、経義もさとり、

または文作るの法をも知り、まことに我人の及ぶべきにもあらず、尊き書物なりといひて、朝夕喜びて読みけるが、折々いへるは、このところは文字余り、このところは文字足らずして読みがたし。これは顚倒して句読をなせし故なるべし。 H とやいふべき。惜しむべき事なりと語りき。また正徳信使(注3)の時、四六の啓札(注4)を韓人に送りし人ありしに、この人はいかが物学びして、かくまで妙なる文をば書きたるやと喜びあへりき。これらはもろこし音を学びたるにはあらねど、その才高く、しかも学いたりて、異国の人をも感ぜしむるなり。

(注) 1「淮」…黄河と長江との間を東西に流れる中国第三の大河。華北と華南との境界と見なされる。
2「黄檗の課誦」…黄檗宗で勤行の際に中国語音で唱えられる経文。
3「正徳信使」…正徳元年(一七一一)秋に来訪し、翌年春帰国した朝鮮通信使。
4「四六の啓札」…四字、六字から成る対句を連ねた、美文調の書状。

問一　問題文甲のA・C・Gの意味として最も適当なものを、それぞれ次のイ～ニの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

A
イ　もっと精巧な文字が発明できたはずなのに
ロ　誰しもが文字を読み書きできたはずなのに
ハ　詩文の才能を磨くことができたはずなのに
ニ　漢字を自在に操ることができたはずなのに

C
イ　不可思議な才能と考えるかもしれない。
ロ　風流な嗜みであると賞賛するであろう。
ハ　珍妙奇天烈なことだと不審がるはずだ。
ニ　深く情趣を解すると考えるに違いない。

G
イ　外交上の儀礼として準用することは難しい。
ロ　日本中で一般に適用するわけにもいくまい。
ハ　異国間の通商を促進する制度とも言えない。
ニ　国際的共通語として定めることもできない。

問二　問題文甲の傍線部B「ひとかたのみを知れる言葉なるべし」の説明として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　中国語の力が詩文を作るのに必須というのも、そうでないとするのも、ともに不十分な見方である。
ロ　中国語が真に理解できなければ、漢詩文を作れないとする意見は、中国人の立場からの偏見である。
ハ　中国語ができなければ漢詩文をよく作ることができないとの主張には、一応もっともな理由がある。
ニ　中国語がいくら上達しても、日本人には漢詩文を作ることは不可能だとの決めつけは、誤りである。
ホ　中国語の運用能力や詩文の才能は、その人のもつ豊かな文学的資質とは、本来無関係なものである。

問三　問題文甲の空欄 D には、形容詞「すくなし」に助動詞「べし」が接続した文節が入る。文法的に正しい形を作り、すべてひらがなで、解答欄(記述解答用紙)に記せ。

問四　問題文甲の傍線部E「げにも」に対応する内容の説明として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　風土によって事物が変化していくのは当然である。
ロ　本格的に語学を学習し身につけるのが肝要である。
ハ　言葉の壁は努力によって克服しなければならない。
ニ　言語の変化は万国共通の真理と考えざるを得ない。
ホ　文法的知識よりも正しい発音の会得が大切である。

問五　問題文甲の空欄 F には、すぐ後に併記される「不了簡」と意味の近い、漢字三字の語句が入る。最も適当な語句を、解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問六　問題文甲の空欄 H に入るのに最も適切なことわざを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　医者の不養生　　ロ　河童の川流れ　　ハ　紺屋の白袴　　ニ　玉にきず　　ホ　暖簾に腕押し

問七　問題文甲の内容と合致するものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　中国の現代語に通じることは、古典語で作られる漢詩に巧みであることを保証しない。

ロ　中国語と日本語の相違は克服できるものでなく、取り入れた発音も自然に変化した。

ハ　韓国語は日本語と極めて近い言語であるため、たいていの人が容易に習得できる。

ニ　日本人であって才能ある者は、中国人や韓国人よりずっと優れた漢詩が作れた。

ホ　中国とも韓国とも、互いに言葉を理解し合い、友誼を深めなければならない。

乙

〔次に示すのは、『全唐詩』所載の「銜命還国作」と題する詩（五言排律）である。なお、傍線部・空欄および問題に関連する箇所の一部の送り仮名、返り点は省いてある。〕

銜命還国作

銜命将辞国　　B
非才忝侍臣　　C
天中恋明主
海外憶慈 X
伏奏違金闕
騑驂去玉津
蓬萊郷路遠
若木故園隣
西望懐恩日
東帰感義辰
平生一宝剣
留贈結交人　　D

（注）「若木」…日の没するところに生えている木の名。

問八　問題文乙の「銜命還国作」と題する詩は、問題文甲の二重傍線部「阿倍のなにがし」の詠作として収載される。その人物は誰か。その日本名の名前を漢字で解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問九　問題文乙の傍線部A・Bの「国」は、どの国をいうか。次のイ～ニの中から正しいものを一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　A・Bともに、作者が仕えた国。
ロ　Aは作者が仕えた国で、Bは作者の故国。
ハ　Aは作者の故国で、Bは作者が仕えた国。
ニ　A・Bともに、作者の故国。

問十　問題文乙の傍線部C「非才忝侍臣」の書き下し文として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　さいをひとしてかたじけなきじしんなり
ロ　さいにあらずじしんにかたじけなくす
ハ　ひさいしんをじするにかたじけなし
ニ　さいあらずじしんをかたじけなし
ホ　ひさいじしんをかたじけなくす

問十一　問題文乙の空欄 X に入る最も適当な語を、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　悲　ロ　母　ハ　父　ニ　愛　ホ　親

問十二　問題文乙の傍線部D「結交人」とあるが、その「結交人」の一人である王維には「送秘書晁監還日本国」と題する詠作（全十二句）がある。なお、「晁監」とは「阿倍のなにがし」を指す。この詩の第五・六句に、

向レ国唯看レ日
帰帆但信レ風

と詠じている。第五句の「唯看日」は、具体的にどのようなことを意味するか。「銜レ命還レ国作」の詩句の中から最も適当な語句（漢字二字）を抜き出して、解答欄（記述解答用紙）に記せ。

（二）次の文章は、中野好夫が一九四九年に書いた「悪人礼賛」と題するエッセイである（一部省略した箇所がある）。これを読んで、あとの問いに答えよ。

由来ぼくの最も嫌いなものは、善意と純情との二つにつきる。

考えてみると、およそ世の中に、善意の善人ほど始末に困るものはないのである。ぼく自身の記憶からいっても、ぼくは善意、純情の善人から、思わぬ迷惑をかけられた苦い経験は数限りなくあるが、聡明な悪人から苦杯を嘗めさせられた覚えは、かえってほとんどないからである。悪人というものは、ぼくにとっては案外始末のよい、付き合い易い人間なのだ。という意味は、悪人というのは概して聡明な人間に決っているし、それに悪というもの自体に、なるほど現象的には無限の変化を示しているかもしらぬが、本質的には自らにして基本的グラマーとでもいうべきものがあるからである。悪は決して 1 でない。そこでまずぼくの方で、彼らの悪のグラマーを一応心得てさえいれば、決して彼らは無軌道に、下手な剣術使いのような手では打ってこない。むしろ多くの場合、彼らは彼らのグラマーが相手によっても心得られていると気づけば、その相手に対しては仕掛けをしないのが常のようである。

それにひきかえ、善意、純情の犯す悪ほど困ったものはない。第一に退屈である。さらに最もいけないのは、彼らはただその動機が善意であるというだけの理由で、一切の責任は解除されるものとでも考えているらしい。

かりにぼくがある不当の迷惑を蒙ったと仮定する。開き直って詰問すると、彼らはさも待っていましたとでもいわんばかりに、切々、咄々としてその善意を語り、純情を披瀝する。驚いたことに、途端にぼくは、結果であるところの不当な被害を、黙々として忍ばなければならぬばかりか、おまけに底知れぬ彼らの善意に対し、逆にぼくは深く一揖して、

A 深甚な感謝をさえ示さなければならぬという、まことに奇怪な義務を負っていることを発見する。驚くべき錦の御旗なのだ。もしそれ純情にいたっては、世には人間四十を過ぎ、五十を越え、なおかつその小児の如き純情を売り物にしているという、不思議な人物さえ現にいるのだ。

それにしても世上、なんと善意、純情の売物の夥しいことか。ひそかに思うに、ぼくはオセロ(注1)とともに天国にあるのは、その 2 さ加減を想像しただけでもたまらぬが、それに反してイアゴーとともにある地獄の日々は、それこそ最も新鮮な、尽きることを知らぬ知的エンジョイメントの連続なのではあるまいか。

善意から起る近所迷惑の最も悪い点は一にその無法さにある。無文法(ノー・クラマー)にある。警戒の手が利かぬのだ。悪人における始末のよさは、3 彼らのゲームにルールがあること、したがって、ルールにしたがって警戒をさえしていれば、彼らはむしろきわめて付合いやすい、後くされのない人たちばかりなのだ。ところが、善人のゲームにはルールがない。どこから飛んでくるかわからぬ一撃を、絶えずぼくは恂々(きょうきょう)としておそれていなければならぬのである。

その意味からいえば、ぼくは聡明な悪人こそは地の塩であり、世の宝であるとさえ信じている。狡知(こうち)とか、奸知(かんち)とか、B ケンボウとか、術数とかは、およそ世の道学的価値観念からしては評判の悪いものであるが、むしろぼくはこれらマキアベリズム(注2)の名とともに連想される一切の観念は、それによって欺かれる愚かな善人さえいなくなれば、すべてこれ得難い美徳だとさえ思っているのだが、どうだろうか。

友情というものがある。一応常識では、人間相互の深い尊敬によってのみ成立し、永続するもののように説かれているが、年来ぼくは深い疑いをもっている。むしろ正直なところ真の友情とは、4 相互間の正しい軽蔑の上においてこそ、はじめて永続性をもつものではないのだろうか。

「世にも美しい相互間の崇敬によって結ばれた」といわれるニーチェ(注3)とワーグナーの友情が、僅々数年にしてはやくも無残な破綻を見たということも、ぼくにはむしろ最初からの当然結果だとさえ思えるのだ。伯牙(はくが)(注4)に対する鍾子期(しょうしき)の伝説的友情が、前者の人間全体に対するそれではなく、単に琴における伯牙の技に対する知音としてだけで伝えられているのは幸いである。伯牙という奴は馬鹿であるが、あの琴の技だけはなんとしても絶品だという、もしそうした根拠の上にあの友情が成立していたのであれば、ぼくなどむしろほとんど考えられる限りの理想的な友情だったのではないかとの思いがする。

友情とは、相手の人間に対する九分の侮蔑と、その侮蔑をもってしてすら、なおかつ磨消し切れぬ残る一分に対するどうにもならぬ畏敬と、この両者の配合の上に成立する時においてこそ、最も永続性の可能があるのではあるまいか。十分に対するベタ惚れ的友情こそ、まことにもって禍なるかな、である。

金はいらぬ、名誉はいらぬ、自分はただ無欲でしてと、こんな大それた言葉を軽々しく口にできる人間ほど、ぼくをしてアクビを催させる存在はない。

金がいらぬという男は怖ろしい。名誉がいらぬという男も怖ろしい。無私、無欲、滅私奉公などという人間にいたっては、ぼくは逸早(いちはや)くおぞ気をふるって、厳重な警戒を怠らぬようにしてきている。 a 、この種の人間は何をしでかすかわからぬからである。 b 情ないことに、そうした警戒をしておいて、後になってよかったと思うことはあっても、後悔したなどということは一度もない。

近来のぼくは偽善者として悪名高いそうである。 c 、もしさいわいにしてそれが真実ならば、ぼくは非常に嬉しいと思っている。ぼく年来の念願だった偽善修業も、ようやく齢知命(よわい5)に近づいて、ほぼそこまで到達しえたかと思うと、いささかもって嬉しいのである。

景岳橋本左内(注5)でないが、ぼくもまた十五にして稚心を去ることを念願とした。そしてさらに二十代以来は、いかにして偽善者となり、いかにして悪人となるかに、苦心修業に努めて来たからである。 d 、ぼく自身では今日なお時に、無意識に、ぼくの純情や善意がぼくを裏切り、思わぬぶざまな道化踊りを演じるのを、修業の未熟と密(ひそ)かに深く恥じるところだっただけに、この定評、いささかぼくを満足させてくれるのだ。

e 、これはなにもぼくだけが一人悪人となり、偽善者たることを念願するのではない。ぼくはむしろ世上一人でも多くの聡明なる悪人、偽善者の増加することを、どれだけ希求しているかしれぬのである。理想をいえば、もしこの世界に一人として善意の善人はいなくなり、一人の純情の成人小児もいなくなれば、人生はどんなに楽しいものであろうか、考えるだけでも胸のときめきを覚えるのだ。 6

されば世のすべての悪人と偽善者との上に祝福あれ！

（注）1「オセロ」…シェークスピア『オセロ』に登場するムーア人の将軍。部下のイアゴーの計略にかかって破滅する。
2「マキアベリズム」…イタリア・ルネサンス期の思想家マキャベリに由来し、一般には目的のために手段を選ばないやり方をさす。
3「ニーチェ」…十九世紀のドイツの哲学者。作曲家・指揮者ワーグナーの音楽に触発されて深い親交を結んだが、後年は決別することとなった。
4「伯牙」…春秋時代の琴の名人。自分の音楽の唯一無二の理解者であった鍾子期が死ぬと、伯牙は琴をこわし、二度と手にしなかったと伝えられる。
5「橋本左内」…幕末の志士。福井藩士。景岳と号した。

問十三　傍線部Aの漢字の読みをひらがなで、傍線部Bのカタカナを漢字で、それぞれ解答欄（記述解答用紙）に記せ。ただし漢字は楷書で正確に書くこと（乱雑な文字や字画の曖昧な文字などは不正解とする）。

問十四　空欄 1 ・ 2 に入る漢字二字の語句をそれぞれ文中から抜き出し、解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問十五　傍線部3「彼らのゲームにルールがあること」とはどのような意味か。最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に記せ。
イ　聡明な悪人の手口には常に決まったパターンがあるということ。
ロ　聡明な悪人には筋道立った論理と合理性が備わっているということ。
ハ　聡明な悪人ほどみずからの悪事をゲームのように見立てているということ。
ニ　聡明な悪人は法律や道徳を無視して自分たちのルールを作っているということ。
ホ　聡明な悪人どうしが連携して暗黙の了解のもとに悪事が行われているということ。

問十六　傍線部4「相互間の正しい軽蔑」を具体的に説明している部分を、文中から六十字以上七十字以内で過不足なく選び出し、冒頭と末尾の五字ずつを解答欄（記述解答用紙）に記せ。句読点がある場合には字数に含むこと。

問十七　空欄 a ～ e には次のイ～ヘの中の語句が一つずつ入る。ただし入らない語句が一つ含まれている。その語句を選び、マーク解答用紙に記せ。
イ　あるいは　　ロ　いいかえれば　　ハ　しかも
ニ　それにもかかわらず　　ホ　だが　　ヘ　もっとも

問十八　傍線部5「知命」は『論語』の「知天命（天命を知る）」による年齢の異称である。何歳のことか、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に記せ。
イ　三十歳　　ロ　四十歳　　ハ　五十歳　　ニ　六十歳　　ホ　七十歳

問十九　空欄 6 に入る文として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に記せ。
イ　その時こそは自分一人が、悪人や偽善者の汚名を着ることもなく、したがって悪や偽善者ということばそのものが消え失せる世界となるだろうからである。
ロ　その時こそは社会的な道徳や評価にかかわらず、お互いの主義や立場を乗り越えて、人と人との真の友情と結びつきが生まれる世界となるだろうからである。
ハ　その時こそは始めて、泥のなかから大輪の蓮の花が開くように、偽善や悪の満ち満ちたなかから、文字通り純粋無垢の善が輝きだす世界となるだろうからである。
ニ　その時こそは誰一人、不当、不法なルール外の迷惑を蒙るものはなく、すべて整然たるルールをまもるフェアプレーのみの行われる世界となるだろうからである。
ホ　その時こそは人々が道学的な価値観念から解放され、曇りのない眼で善意を善意として享受し、悪を悪として裁断することができる世界となるだろうからである。

問二十　問題文の趣旨と一致するものを、次のイ～ヘの中から一つ選び、マーク解答用紙に記せ。

イ　筆者が善意と純情を嫌うのは、善意と純情の奥底にはつねに、相手をおとしめようとする悪意と狡知が潜んでいるからである。

ロ　何が悪であり何が偽善的な行為であるかは、社会的な道徳や価値観が時代とともに変遷するので、一概に判断することはできない。

ハ　十代二十代の若い時代には、だれしも善意や純情の価値をうたがわないが、年齢を重ねていくほどに俗世間の悪や偽善をも許容するようになる。

ニ　聡明な悪人の行為は社会的なルールを踏み外すことがないので、誰も迷惑を蒙ることもなく、まったく罪に問われることもない。

ホ　友情が長続きするためには、相手への信頼が不可欠であるというのは誤りで、実はお互いを軽蔑しあうところから真の人間関係が生まれてくる。

ヘ　ただ善意や純情をおしつけあうところには、信頼できる人間関係は生まれず、かえって思いがけない災難や迷惑を蒙る原因にもなる。

問二十一　筆者の中野好夫は昭和期の評論家・英文学者で、『蘆花徳冨健次郎』などの評伝にも新機軸を拓いた。次のイ～ホの中から徳冨蘆花の作品を一つ選び、マーク解答用紙に記せ。

イ　細雪　　ロ　檸檬　　ハ　不如帰　　ニ　虞美人草　　ホ　金色夜叉

(三)　次の文章は、山崎正和が二〇一一年に刊行した『世界文明史の試み』の序章の一節である（一部省略した箇所がある）。これを読んで、あとの問いに答えよ。

何ごとであれ目に見える存在には様式というものがあるが、当然、現代の健康にも、健全な身体のあり方にも一定の様式がある。どんな身体が健康であるか、どんな身体の容姿と機能が理想的であるか。それについていま、一つの価値観が世界を覆いつつあるといえる。

きわめて大ざっぱにいえば、現代の身体の理想像には古典ギリシャ彫刻の様式が復活したといえそうである。容姿に関しては、ほぼ七頭身か八頭身の頭身比例が好まれ、女性ならくびれた腰と豊かな乳房、男性なら高い身長と筋肉質の胸や四肢が喜ばれる。顔については「A　眸皓歯」が男女ともに好まれ、この理想像は映画やテレビや広告写真などに載って、人種と民族を問わず受容されている。もちろん髪型や化粧の細部はめまぐるしく変化するが、この変化も服飾の流行と同様、ほとんど瞬時に世界各国に伝播している。

かつて民族ごとにあった特殊な身体風俗、顔を含む全身の刺青や首の延伸、耳朶や唇に円盤を嵌めこむ変形手術、中国全土に見られた纏足などの身体矯正の伝統は消滅した。日本でもお歯黒や「富士額」の美意識は忘れられたし、履き物の変化とともに女性の歩き方の規範も大きく変わることになった。西洋におけるコルセットの廃止、入浴の頻度のいちじるしい増大なども、そうした身体文明の世界的統一の一例に数えられるだろう。

だが身体についてより重要なのは、容姿よりも運動能力であるのはいうまでもない。身体はその筋肉と骨格の構造から、つねに動こうと身構え、格別の目的がなくてもたえず小さく動いている存在である。そして逆に身体は動くことによって形成され、動きの様式によって容姿と形態を決定されている。ホモ・サピエンスはもともと二足歩行の可能な身体構造を備えているが、その構造は幼児期に教育を受けたうえ、現に歩くことによって初めて完成され、一生を通じて歩き続けることによって強化されているのである。

その意味で身体のあり方と運動の様式はほぼ同義語なのであるが、この様式が十九、二十世紀を通じて世界的に標準化されてきたのは明らかだろう。もっとも身体運動の標準化は、十九世紀段階ではおもに生産労働の規格化を通じておこなわれた。機械生産が普及したうえ、農業や土木工事のような作業も近代化され、それに応じて労働の仕方も世界共通の様式を持ち始めた。もちろん職人仕事、家事労働といった分野ではまだ伝統の違いが残っているが、大企業の事務や製造や販売の現場など、文明の中心を占める労働の分野では国際化が進んだ。早い話が、算盤や鋸の使い方には地域

による差違があるが、電卓や電動鋸の操作法にはもはやそんなものはないのである。

そういえば、かつて農耕民族は二拍子の運動を好み、狩猟民族は三拍子を喜ぶといった文明論が語られることもあった。それ自体の真偽はともかく、いずれにせよそうした文明を分かつような大きな運動様式の対立は消えていった。日本人の歩き方を例に見ても、女性の内股歩きは消滅し、右手と右足を同時に前に出す「なんば」と呼ばれる伝統的な様式も、いまでは相撲と歌舞伎という特殊な分野にしか残っていない。

しかしここで忘れてはならないのは、人間の身体運動はそもそも、そうした生産や実用の世界に限られていないということだろう。[1]身体運動は身体の構造のなかにつねに秘められているものである。外界に働きかけるだけではなく、身体が身体であるために、身体が存続するためにたえず機能しているものなのである。

身体はしばしば、倦怠感や所在なさを解消するためだけにも動く。みずからを癒し、みずからを粧い、みずからを強めるためだけにも動く。何よりもみずからの存在を感じ、それを鋭く意識するために動く。身体はみずからがあることを確かめ、その存在感を味わうためにも運動するのである。要するに生産的、実用的な身体運動が「する」身体の営みだとすれば、ここにはもう一つ別の運動があって、それは「ある」身体の自己確認の営みだといえるだろう。

そしてとりわけ二十世紀に顕著なことは、世界的な統一の趨勢が、この身体の自己確認のための運動の様式にまでおよんだことであった。非生産的、非実用的な行動の様式が、にわかに文明の境を超え始めたのである。

まずいわゆる文化交流の進展に伴って、日常生活の礼儀作法の共通理解が深まった。西洋風のテーブル・マナーと食器が東漸したのにたいして、やや遅れて箸の使い方を西洋人が学ぶようになった。椅子とベッドの生活が日本の家庭に浸透したころ、アメリカの居間ではラグを床に敷いて座ってくつろぐ姿がめだち始めた。握手、抱擁、お辞儀、接吻といった挨拶の様式も、若い世代では異文明のあいだで共通の意味を持つことになった。異質性は宗教儀式とそれにまつわるタブーの領域に限られ、世俗的な祭典というべき交歓の様式は世界のどこでもあい似ている。とくに若者の舞踊や音楽、パーティーやイベントに集まって楽しむ騒ぎ方には、東西南北の違いはほとんどなくなったといえるだろう。

だがそれ以上に重要なのは、二十世紀におけるスポーツの地球規模の普及であった。一つには野球やテニスやサッカーなど商業スポーツの影響、もう一つには一八九六年に始まったオリンピックの寄与が大きかった。

ここで注意しておくべきことは、スポーツが一見、「する」身体の行動であるように見えながら、じつは典型的な「ある」身体の行動だという事実である。たしかに速く走ることも、高く跳ぶことも、ボールを投げたり蹴ったりすることも、一応は身体が外界に関わる行動の一種だろう。だがそのさいスポーツが関わる外界はいわば虚構の外界であって、産業労働や家事労働が関わるような真の現実ではない。スポーツの外界は、真の現実がつねに持つ偶然性を極限まで免除され、現実行動にとっては避けがたい、いわゆる [B] からも解放されているからである。

たとえば一〇〇メートル競走の場合、走る路面は完全に平坦に整備され、ランナーは風を除くいっさいの [C] に配慮する必要はない。これが現実の疾走なら、走者は路面の状況から交通渋滞、風雨から自分の服装にいたるまで、おびただしい [C] の心配にわずらわされて走らなければなるまい。ついでにいえば、スポーツでは競技者は目的も方法も厳密に与えられていて、目的にとって最適の方法をみずから選択するというわずらいも持たない。現実の走者はあまたある移動手段の比較考量を迫られるのにたいして、一〇〇メートル走者はただ足で走ればよいのである。

さらにスポーツが選手に与える行動の目的は、スポーツそのものが決めたルールがあるだけで、それ以上の広い現実の要求によるものではない。マラソンが四二・一九五キロメートル走るのは [D] なルールにすぎず、真の現実のなかで合理的な意味は持たない。裏返していえば、マラソンの完走はそれだけで [E] を持つのであって、より上位の意味を持つ目的の手段となって奉仕することはないのである。現実の人生において、すべての行動の目的がその次の目的の手段となる関係にあって、目的が無限の連鎖をつくっているのに比べて何という違いであろう。

こう考えると、スポーツの本質はやはり舞踊や化粧や礼儀作法に似ていて、自己の「ある」身体を一定の様式によって確認する方法だと理解できる。それは何かを「する」ことによって外界に関わる行動ではなく、[F]、いいかえれば「私である」身体に関わって、その存在感を確認して楽しむ営みだといえる。各種のスポーツのジャンルとそれぞれのルールは、その自己確認のための様式であって、また反対に、それに従うことによって身体そのものも存在様式を獲得することができるのである。

問二十二　空欄 A に漢字一字を入れると容貌に関する四字熟語が完成する。その漢字を解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問二十三　傍線部1「身体運動は身体の構造のなかにつねに秘められているものである」の意味として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　身体運動は私たちがあえて何かをしようとするときだけではなく、筋肉や骨格の構造という私たちの身体のしくみにしたがって、つねにその内部でもおこなわれている。

ロ　身体運動は生産的、実用的に発揮されるだけではなく、つねにそれと平行して私的、非実用的な形でも遂行されるように身体のなかで準備されている。

ハ　身体運動はおもてにあらわれるその形に本質があるというよりは、身体の構造のなかに隠されたその状態に本来の姿がある。

ニ　身体運動はその場で全面的に発揮されるものではなく、身体構造のなかにつねになにがしかは残ったままになっている。

ホ　身体運動は外界に向けておこなわれるだけではなく、じつは身体の構造を通じて精神の深部にも作用する。

問二十四　空欄 B に入る最も適当な語句を、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　選択の自由　　ロ　方法の必然　　ハ　理想の実現　　ニ　目的の連鎖　　ホ　虚構の必要

問二十五　空欄 C（二箇所ある）に入る漢字三字の語句を文中から抜き出し、解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問二十六　空欄 D ・ E に入る語句として最も適当なものを、それぞれ次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

D　イ　空間的　　ロ　主観的　　ハ　自然的　　ニ　人間的　　ホ　恣意的

E　イ　開かれた意味　　ロ　現実的な意味　　ハ　合理的な意味　　ニ　完結した意味　　ホ　理想的な意味

問二十七　空欄 F に入る最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ　行動するだけで価値のある身体

ロ　存在するだけで価値のある身体

ハ　行動するだけでは価値のない身体

ニ　存在するだけでは価値のない身体

ホ　存在と行動の完全に一致する身体

問二十八　問題文の趣旨と一致するものを、次のイ～ホの中から二つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　身体のあり方と運動の様式が地球規模で標準化したにもかかわらず、「する」身体と「ある」身体という観点に立つと、スポーツによる身体の自己確認に関して興味深い事実が指摘される。

ロ　身体運動の標準化は十九世紀以来まず「する」身体において進行したが、「ある」身体は基本的に非生産的、非実用的なものであるためにその標準化はなかなか思うように進んでいない。

ハ　身体のあり方と運動の様式について一つの価値観が世界を覆いつつあるが、しかし「する」身体と「ある」身体という観点に立つと、後者に対する前者の優位が特にスポーツの普及を通じて明らかに認められる。

ニ　「私である」身体の存在感を確認して楽しむ営みであるという点において、スポーツは舞踊や化粧や礼儀作法に似ていて、偶然性を排し、繰りかえしの要素を含みつつ、しかしその度ごとの発見や成功、そして喜びを伴うものである。

ホ　健康な身体についての同じ価値観が世界を覆いつつある今日、ますます商業化の進んでいくスポーツは何らかの宗教的な意味を見いだして異質化を図らない限り、「する」身体と「ある」身体の区別に関係なく存在意義を失う瀬戸際にある。

問二十九　問題文の趣旨に即して、「する」身体と「ある」身体とのあいだに見いだされる違いを、三十字以上四十字以内で**解答欄（記述解答用紙）**に記せ。その際、次の条件にしたがうこと。

一　キーワードとして「画一性」「個別性」という語句を文中に用いること（ただし、カギカッコをつけなくてよい）。

二　句読点や符号なども字数に数えること。

三　文頭の一マス目を空けないこと。

〔以　下　余　白〕